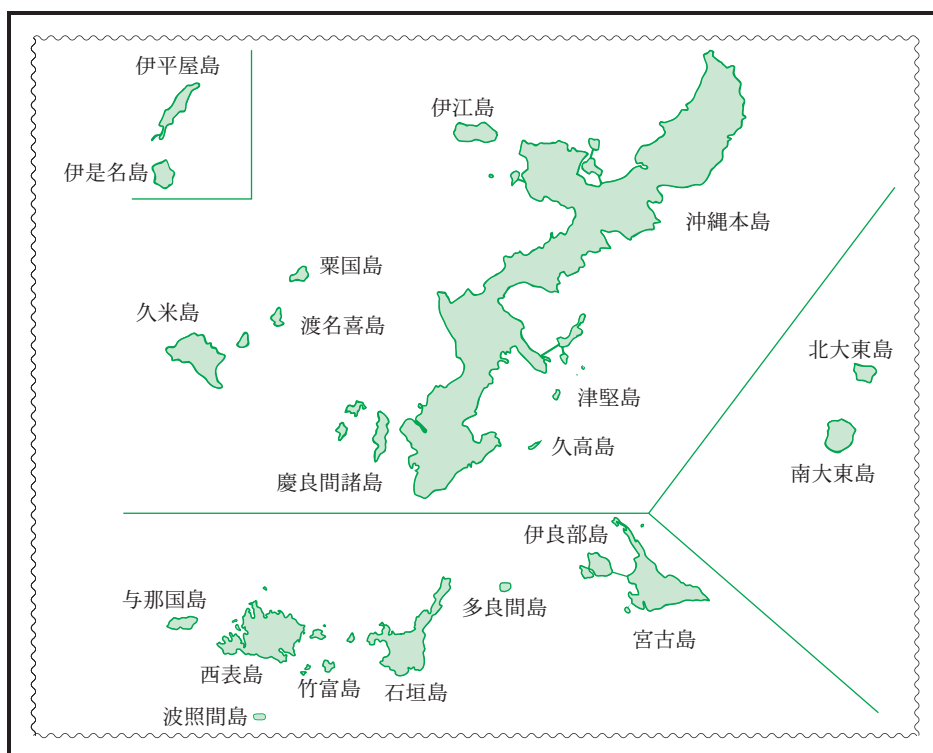




沖縄県小学校長会
沖縄県中学校長会

第 83 号

会 報



も く じ

1. 今年度の活動を振り返って
 変革の時代に柔軟に対応し
 効果的な教育を展開するチーム校長会
 沖縄県小学校長会 会長 宮 國 義 人 …… 1
 那覇市立銘苅小学校 校長
2. 特色ある学校づくり
 (1) 恵まれた学校環境を活かした
 児童の自己肯定感を高める取組の推進
 石垣市立野底小学校 校長 仲 皿 利 治 …… 3
 (2) 地域とともに、「島建ち」の教育
 伊江村立伊江中学校 校長 玉 城 学 …… 5
3. 校長講話
 (1) 校長から放たれた言葉が 職員の言葉となり
 さらに 子どもの言葉として 学校中に響きわたったとき
 教育活動が活性化し 学校文化が創造される
 読谷村立喜名小学校 校長 金 子 雅 之 …… 7
 (2) 学校教育目標達成をめざす講話実践
 那覇市立首里中学校 校長 比 嘉 俊 博 …… 8
4. 第74回九州地区小学校長協議会研究大会長崎大会参加報告
 長崎での学びを自校の取り組みに
 南城市立百名小学校 校長 仲 村 保 …… 10
5. 第74回全国連合小学校長会研究協議会島根大会参加報告
 豊かな来社会を創る子どもの育成
 那覇市立銘苅小学校 校長 宮 國 義 人 …… 12
6. 第73回全九州中学校長研究大会福岡大会参加報告
 全九州中学校長研究大会福岡大会に参加して
 宮古島市立伊良部島中学校 校長 與那覇 盛 彦 …… 14
7. 第73回全日本中学校長会研究協議会北海道(札幌)
 大会【オンライン形式】参加報告
 イランカラブテ 北の大地から新たな学びを紡ぎ その先へ
 座間味村立慶留間中学校 校長 大 城 圭 …… 16

今年度の活動を振り返って



変革の時代に柔軟に対応し 効果的な教育を展開するチーム校長会

沖縄県小学校校長会 会長
那覇市立銘対小学校 校長 宮國 義人

一 はじめに

世の中がどんなに厳しい状況になっても、目の前に児童生徒がいる限り、学校は立ち止まることなく、児童生徒一人一人に今後必要な資質能力を育む教育を着実に推進しなければなりません。そして校長には、社会の様々な状況を複眼的に捉えらるとともに、学校教育が担っている役割を踏まえ、児童生徒の未来を保証する実践を教職員や保護者、地域の方々と心を一つにして推進するための様々な能力が求められています。

その点において、校長一人一人が担っている職責は絶大に大きく、その屋台骨としての自らの経営方針と、校長会の経営指針等を踏まえて、効果的・効果的な実践を展開する必要があります。

ところで、過去二年間は、新型コロナウイルス感染症対策により、殆どの学校行事を中止せざるを得ない状況が続きました。しかし、本年度は過去二年間の経験を基に感染状況を勘案して、適宜・適切に行事等を実施することができるようになってきました。この一つ一つの取組の実施について判断しているのが、私たち校長です。その際、近隣校の校長同士で情報交換しながら、実施の可

否を判断した校長も多いのではないのでしょうか。なお、校長の判断を尊重し、懸命に教育の充実に関心している教職員一人一人の参画意識が経営の充実につながっていることを忘れてはならないし、それに対して感謝の気持ちを表することも忘れてはいけません。

このような中、本年度の研究大会は、三年振りの参集型の開催に向けて、島尻地区校長会の皆さんには試行錯誤を重ねて頂きました。しかし、新型コロナウイルス感染症が収束の兆しを全く見せなかつたため、七月上旬に参集型の大会を取りやめ、誌上及びオンラインでの開催方法に変更しました。なお、各分科会の提案者や研究部、そして事務局の迅速な対応により、『大会要録』を十月中旬に全会員に配布したこと、本年度初めて冊子にまとめた『地区別提案資料』を事前に全会員の手元に届けたことは、今回の研究大会を充実させる上でも、今後に繋げる上でも有意だったと捉えています。

ところで校長会の方針として、活動方針については、「4教育振興のための世論喚起に関すること」との並びと文言を変更したり、学校経営指針に

ついては、「1特色ある学校づくりを目指した学校経営の充実」を十項目から九項目にまとめたこと、より現状に即した内容に変更しました。以下、各活動毎に本年度の活動を振り返ります。

二 全連小理事會・全国会長會・九小協幹事會

昨年度は、オンラインでの開催がほとんどでしたが、本年度は、全連小理事會も全国会長會も九小協幹事會も全て現地参集型での開催でした。一堂に会して、全国及び九州各県の代表と対面で意見を交わすことができるなど、対面のよさを味わいつつ、各都道府県の状況について共有できたことは大変有意義でした。

特に、各会合で懸案事項として挙げたのは、全国的に、採用試験の志願者が減少の一途を辿っていること、教員の未配置問題など、学校経営の充実を大きく左右する事項でした。

そこで共有したことは、十年後、二十年後を見据えて、今できることとして、働き方改革を推進し働きやすい環境を構築すること、児童生徒が憧れを抱く魅力のある教師を育てることに注力する必要が一層高まっている。ということでした。そしてその全てを私たち校長が担っており、その職責の重要性についても確認しました。

今後、県内で様々なことに取組み成果を上げていく校長の実践を共有し、児童生徒にとっては学ぶことが楽しい学校づくりを、教職員にとつては働きがいのある環境づくりを、全会員で推進することの重要性にも気付く全連小理事會等でした。

三 県小・中学校長研究大会

第六十三回沖縄県小・中学校長研究大会島尻大会を、誌上及びオンラインで開催しました。

(一) 分科会

各分科会の発表については、一定期間、校長会のwebにアップしたことで、全会員で全ての分科会の取組みを共有することができました。各分科会の発表を拝聴すると、各学校で児童生徒の実態を的確に捉えるとともに、地域の人的な資源と物的な資源を有効に活用しながら、魅力ある学校づくりを励んでいることが手に取るようわかり、嬉しく思いました。

(二) 記念講演

文部科学省国際統括官付国際戦略企画官の白井俊氏を講師に招いて、「国際的な視点から考える日本の教育」と題した講話を、当初は十一月十一日に予定していましたが、Zoomの人数制限により対応できず、やむを得なく十二月二十六日に延期し、実施しました。

白井氏は、学校教育法の改定や大学入試改革、そして学習指導要領の改訂にも関わった方であり、世界的な教育の変遷から今後の授業づくり等に生かせる具体的な取組みに至るまで、示唆に富む内容を懇切丁寧に述べていました。

多忙を極める要職にありながら、日程を二度も確保して頂いたことに、心から感謝致します。

四 本年度の活動

(一) 地区教育懇談会（教育行財政部）

地区教育懇談会は、各地区校長会役員と県校長会役員が懇談を通して、県校長会の活動方針と趣旨の共有、教職員の処遇及び教育環境や諸条件の整備等、重要課題について情報交換を行い、学校経営の充実を資することを趣旨に実施しています。毎年改善を重ねている集約方法等について、今年度は各事項にリンク付けを行い、最重要課題、新規課題、重点課題に分類するなど、更に内容が充実しました。その「校長会からの要望事項」を、

行政との連絡会で明確に示し要望するとともに、教員育成協議会や全連小等での意見交換等でも活用しました。改善・充実に努めながら取りまとめに尽力した県部長及び各地区の部長の皆さんに感謝致します。

(二) 校長会と行政との連絡会

本年度、最重要課題として教育庁に要望したのは、①臨時的任用職員の確実な配置に向けた人材確保、②学校への依頼文書や学校対象調査報告の削減及び簡素化、③集団宿泊学習の引率に係る特別支援学級担任枠の設置などでした。特に、①に関しては、臨任として、勉強する時間を削りながら、学校経営を支えて頂いている皆さんへの採用試験制度の見直しについて強く要望しました。その後、教育庁は、年齢制限や一部試験免除制度等について見直しましたが、臨任の皆さんの意欲を更に高めるための抜本的な試験制度の見直しについて、次年度も強く要望する必要があります。

(三) 研究活動

調査研究部

持続可能な質の高い教育活動を目指し、『働き方改革』について、主に各学校の状況をまとめ、会員だけでなく、各自治体へも提供し共有しました。

生徒指導委員会

『チーム学校』による支援と活性化に向けてのサブテーマのもと、各地区の十五校の実践事例をまとめて共有しました。各校の事例を簡潔にまとめると、地域の教育的資源を生かしつつ、児童生徒の主体性を大切にすることで、相互の人間関係づくりや集団づくりに努めている。という旨でした。

教育改革委員会

小学校はカリキュラムマネジメントの視点で、中学校は部活動の適正化の視点で、各校の「働き方改革」の取組状況について、効果的な取組事例

も紹介しながら簡潔にまとめ共有しました。

学力向上推進委員会

各地区で効果を上げていている学校の取組やそれに係る校長の関わりについて、小・中学校各六校の実践事例を共有しました。その中で、経営方針については年度当初だけでなく、校長だより等で適宜共有していることも記されており、校長先生方の地道な実践に頭が下がる思いがしました。

五 おわりに

本県は、古から万国津梁や守禮之邦、イチヤリバチヨードー、ユイマールの心を大切にしてきました。これらは今後も普遍的なこととして学校教育でも大切にし、児童生徒一人一人を全面的に支援する教育を充実させる必要があります。またそれを基盤にして、児童生徒一人一人が夢や希望を持って伸び伸びと活動できる教育を充実させ、本県の是である「人材を以て資源と為す」を成就する取組を着実に推進することも必要です。

結びに、令和五年度の県校長研究大会は国頭大会となります。四年前に参集型で実施した国頭大会が再出発の大会となり、この三年間で昇任した校長も一緒になって、お互いの実践を共有したり、今後の方向性を確認したりするなど、研究を深めることができる研究大会になることを切望しています。なお、令和六年度第七十六回九州地区小学校長協議会研究大会沖縄大会も二年後に控えています。その成功に向けての動きも加速させる必要があります。今後、チーム校長会として、変革の時代に柔軟に対応し、全ての児童生徒が輝く効果的な教育を推進しましょう。

昇任（令和四年八月二十五日付）

浦添市立港川小学校 校長 金城勝己

特色ある学校づくり



恵まれた学校環境を活かした 児童の自己肯定感を高める取組の推進

石垣市立野底小学校 校長 仲 皿 利 治

はじめに



本校の所在する野底地区は石垣島の北部に位置し、古くは琉球王朝時代の三百年前に強制移住政策によって村が立てられた。その後廃村となったが、終戦後、昭和二十九年に琉球政府の計画移民として沖縄本島や宮古島、多良間島などから入植した人々によって再び開拓された。風土病のマラリアや自然災害と闘いながらジャングルを開墾する想像を絶する苦難の連続であったと聞いている。校区は広く栄、兼城、下地、多良間、伊土名の五つの集落があり、かつては純農村地域であったが、近年は豊かな自然に魅せられそれを活かした仕事を求めて県内外から移り住んでくる方々も出てきた。



学校の歴史は開拓と同時に始まった。昭和二十九年十二月には住民総出で仮校舎が建設され、令和四年に創立六十八周年を迎える。現在、複式普通学級が三学

級、特別支援学級が二学級で児童数は二十一名、少人数であるが様々な個性を持った子どもたちである。学校の東側に於茂登連山でひととき目立つ野底岳（通称・野底マーペー）がそびえ、北西側に豊かなサンゴ礁を抱える東シナ海、学校に隣接して西浜川、マングローブ群落の吹通川など豊かな自然に囲まれた学校である。

二 学校経営

〔教育目標〕 ①よく考え進んで勉強する子

②明るく、心豊かな子

③健康でねばり強い子

④自然に親しみ郷土を愛する子

本校の教育目標にはいわゆる「知・徳・体」の目標に加え、特色として四番目に自然に親しみ郷土を愛する子の育成が目標として掲げられている。前述のように学校環境に恵まれていたため平成五年〜七年まで文科省・県の環境教育モデル校として野鳥観察やマングローブ林探検、海岸の漂着物調査等を行ったり近年でもウミシヨウブの観察等が行われている。

〔本校児童の課題〕

①学力および自己肯定感の個人差が大きい。

②友だちとの関係づくりが苦手である。

③基本的な生活習慣の確立が不十分である。

教師の目が児童一人一人に行き届き、学習指導や生活指導面で個に寄り添った具体的な指導ができる小規模校、複式学級の良さを活かした教育活動ができる事もあるが一方で前述の本校児童の現状課題もある。今年度は、本校の特色である総合的な学習の時間等における野底の学校環境を活かした取り組みの継続と本校児童の課題を解決するため道徳や特別活動等における児童の自己肯定感を高める取り組みを重点として行ってきた。

三 具体的取り組み

本校校門の側に児童会が立てた大きな看板があり、そこにはふるさと野底や母校を誇らしく思う児童の絵と言葉が書いてある。



野底小学校・のそこ幼稚園は多様な自然に囲まれています。野底マーペー周辺に広がる森にはたくさん生き物が暮らしています。森の水を集めて流れる川は、雄大なマングローブの森を育んでいます。川の水は海へ注ぎ、アマモ場では大潮の日ウミシヨウブの花が咲きます。サンゴ礁はサンゴをはじめ様々な生き物たちであふれかえっています。私たちは野底の豊かな自然に囲まれて、毎日の学校生活を送っています。

〔学校環境を活かした取り組みの継続〕

ウミシヨウブ群落の観察記録

野底在住、エコツアーふくみみの大堀健司・則子両氏の指導で二〇〇八年から総合学習の中で



に気づいたりしながら「お米カレンダー」を作成して学習をまとめた。本校には玉代勢秀尚氏から贈られた立派な旗頭があり、運動会や地域の「つんだら祭」等で披露されている。稲作が島の繁栄につながり、祭事などの文化や島の芸能と密接に関係することを学ぶ機会ともなっている。



五・六年生が取り組み、日本では西表島と石垣島（野底の浜が北限）にしか見られない海草ウミシヨウブの生態について学んでいる。ウミシヨウブは大潮の日に一斉に開花・受粉するが、月の満ち引きを調べ観察することで証明したり、ウミシヨウブ群落の激減がアオウミガメの保護と関係が深いと考え、夏休みの課題としてアオウミガメの目視数を調査したりした。昨年は児童が日本サング礁学会で研究結果を発表した。他にも「吹通川のマングローブ探検」や「漂着物調査(三・四年)」などもあり、学習を通して、野底の自然の豊かさに触れるとともに、自然科学的な目を育て、地球規模で環境問題を考えることにも繋がっている。

稲作体験

二〇一〇年、当時の小川喜美江校長が校庭に田んぼを造り始まった。農家の大浜永太郎氏の指導で「田植え」から「稲刈り・脱穀」までを体験している。その間、三・四年生は稲の成長を観察、記録したり、田んぼを取り巻く生き物のつながりに気づいたりしながら「お米カレンダー」を作成して学習をまとめた。本校には玉代勢秀尚氏から贈られた立派な旗頭があり、運動会や地域の「つんだら祭」等で披露されている。稲作が島の繁栄につながり、祭事などの文化や島の芸能と密接に関係することを学ぶ機会ともなっている。

〔自己肯定感を高める取組の推進〕

【校内研究】道徳科

テーマ：自他を認め合い目標達成に向けて努力する児童の育成・道徳の授業における対話の充実を通して

自分の考えや思いをはっきりと伝えたり、わかりやすく表現することが苦手であることにより児童間のトラブルがあったり、意見の交流や対話がスムーズにいかないという児童の実態から

①道徳の授業において対話が充実する展開を工夫すること。

②教育活動全体を通して自分の考えや思いを表現できる工夫や場の設定をすること。

③目標に向かって努力している姿が認められる場の設定や充実を図ること。

これらを通して自他を認め合う関係を築き、自己肯定感を高める取組を行った。

道徳の研究授業

すべての担当が「対話が充実する手立ての工夫」「対話を学びにつなげる手立ての工夫」を視点に研究授業を行い、ペアやグループでの対話、交流後の自分の考えを再構築する時間の確保、学習前後の自分自身を見つめさせるふり返りの実施等の工夫が見られた。

思いを伝え合う音楽朝会

歌を歌うだけではなく、『ありがとこの花』の色はどんなイメージ？』『平和の鐘』のこの歌詞はどう歌ったらいいの？』歌詞の解釈や歌い方



どもその場で話し合わせたり、特別支援の児童のために手話を取り入れ多様な人権を意識した工夫をした。また、学年ごとの演奏、歌唱に対して必ず感想を発表させるなど頑張りを認めたり、思いを伝えることを大事にしている。

主体性や自己肯定感を育む特別活動

運動会においては、児童の主体的な動きとしてスローガン決めのほか、団体競技の内容を児童が考え、道具の製作準備にも関わった。また、不登校児が運動会に少しでも関われるように卒業アルバム用の撮影係に決めることでエィサーの撮影などで一定時間参加することができた。さらに最近では野良犬、野良猫を助けるための募金活動がしたいと児童会で話し合い、地域の商店にも募金箱の設置協力を依頼し活動を始めている。

四 おわりに

校庭に初代校長石垣信良氏揮ごうの『開拓精神』の石碑がある。過去、現在を問わずこの地に夢と希望をかけ移り住んできた人々を貫くのはこの精神であろう。児童もまた、地域を学ぶ、地域で学ぶことを通してふるさと野底に誇りを持ちつつ、世界に目を向け開拓精神で様々な場所で活躍して欲しい。また、そのような児童が育つ学校を保護者、地域と一体となつて創っていききたい。



特色ある学校づくり



地域とともに、「島建ち」の教育

伊江村立伊江中学校 校長 玉城 学

一 はじめに

本校は沖縄本島の北部、本部半島の北西約9kmの洋上伊江島にある。島のシンボルである城山の麓に位置し、島の玄関伊江港に近づくにつれ、全体がくつきりと眺められる。学校からの眺望もすばらしく、その風景は学校がある場所としては沖縄一と称賛されている。学校周辺は人家に囲まれているが、東から北にかけて広大な農耕地が広がる純農村地域である。



本校のある伊江村には、高等学校の設置がなく、中学校を卒業したら島立ちを余儀なくされる。十五歳で島を離れていく子どもたちに、「夢は世界へ、心に故郷を」をキーワードとした「島建ち教育」を推進している。

具体的なアクションプランとして、島への愛着心の醸成、ふるさとに生きる意欲を育成する「ふるさと教育」、世界で生きる力を養いつつ地域の活性化を図る資質を育成する「グローバル教育」、

相手を思いやり協力する心を育成する「縦の絆活動」の三つを柱に地域ぐるみで子どもたちの教育を行っている。

本校においても、生徒一人一人が将来の夢や希望の実現に向けて粘り強く取り組むことができるように地域、行政と連携し、様々な取り組みを実践しているところである。

二 取り組みの実際

(一) ふるさと学習

「島建ち教育」の具体的なアクションプランのひとつに「ふるさと教育」の推進がある。

地域の教育資源である「ひと、もの、こと」を活用し、ふるさとに誇りをもち、心豊かでたくましい子どもを育むことをねらいとしている。

① 地産地消の取り組み

家庭科の授業で、故郷の味を自分たちで見極め、味わうことなどをねらいとして全学年で給食のメニュー作り



② 魚料理教室

三年生を対象にした伊江漁協による料理教室である。海に囲まれた伊江島の子どもたちが、地元の漁師、組合の女性部の指導を受けながら島の近海で水揚げされた魚をさばき、切り方や調理法を学んだ。親元を離れた後も故郷の味をしつかり調理できるようにと、十一年前から行っている。



③ 弁当の日・肉の日

弁当の日は、伊江村教育委員会、村PTA連絡協議会が主催し、「地産地消の弁当づくり」をテーマに自主自立と弁当作りで得られる家族のコミュニケーションを目的として行っている。

また肉の日は、本島在住の村出身者で構成する伊江島会やJAおきなわ伊江支店、村教育委員会の協力で、三年生にA5ランクの伊江島牛が振る舞われる。十五歳で島を離れる生徒たちに、故郷の味に愛着を持ち、受験に向けて励んでもらおう



うと、地産地消による「島の産業ふれあいプロジェクト」として、二月九日「肉の日」に合わせ毎年開催されている。

(二) キャリア教育

① 「国際理解」島の魅力を発信

キャリア教育を柱とし、ふるさと教育や国際理解ともつながりをもたせながら将来社会人として自立できるための基盤づくりをねらいとして、オンラインツアー「リモート伊江島トリップ」を企画した。授業は島に住みながら海外の人と仕事を



している地域人材を活用した。生徒たちは、ツアーのターゲットとなるシンガポールのことを理解するためシンガポールを拠点にマーケティングなどを行う企業の方々とZOOMでつなぎ、知識を深めながらアドバイスをもらった。島の特産品や観光名所、フォトスポット、レジャー施設、飲食店など島の魅力を伝えるコースを考案し発表した。

② キャリア杯プレゼン大会

課題発見力や解決力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を伸ばすことをねらいとし、総合的な学習の時間に「理想のレストラン」づくりに挑戦した。この授業は伊江村型就業意識向上支援事業による外部人材を活用して、全十二時間のプログラムで行った。理想のレストランを考える上で生徒は、店の稼働率や人件費、売り上げ・利益などビジネスの視点だけではなく、フードロスの削

減、太陽光パネルの設置、バイオマス発電などカーボンニュートラルを取り入れ、環境に配慮する内容も盛り込んだ。また働いている人のウエルビーイングを向上させる方法も取り入れた。

発表会は各グループともパワーポイントで作成した資料を示しながら行った。審査員にはマーケティングの



③ 職場体験授業

外部人材を活用して、二年生に「オンラインゲーム会社体験」授業を行った。全八時間の授業では、生徒たちがオンラインゲーム会社に勤務している設定で、三人一組のグループに分かれ、会社で働く際の基本となる「プランナー（企画）」「クリエイター（製



造)」「セールス（販売）」の三職種をそれぞれが担当した。企画書を基にオンラインゲームを製造、販促するホームページ上の広告を制作し、販売までの流れを体験した。

④ 進路講話・マネープラン

二・三年生を対象に本校卒業生の現役高校生を招き、講話を行った。年齢の近い先輩の具体的な進路選択や高校生活の話聞くことで、具体的な卒業後の進路や生活について考

える機会となつていく。

また、進路選択だけでなく親元を離れての高校生活への不安や悩みなどを抱えている生徒が先輩の体験談を聞くことで、卒業後の生活をイメージし、中学生の段階から自立を意識することや、村外へ出ることで新たに必要となる人間関係をつくる力、コミュニケーションの大切さに気付くことをねらいとした。

マネープラン学習は、親元を離れ自立して生活をする高校三年間にかかる費用や、生涯賃金などを学び、お金の大切さや両親への感謝なども含め経済的な自立に向けた意識づくりに繋げていくことをねらいとして行っている。



三 おわりに

学校と地域が目標を共有し、一体となつて子どもたちを育てていくことは、子どもの豊かな育ちを確保するとともに、そこに関わる大人たちの成長も促していく。それが地域の絆を強め、地域づくりの担い手を育てていくことにもつながっていくと考える。生徒一人一人が夢と希望を膨らませ「島建ち」していく姿を思い描きながら、これからも地域と協働して日々の実践を重ねていきたい。

校長講話



校長から放たれた言葉が 職員の言葉となり

さらに 子どもの言葉として 学校中に響きわたったとき

教育活動が活性化し 学校文化が創造される

読谷村立喜名小学校 校長 金子 雅之

一 はじめに

本校は、喜名区に明治十五年村唯一の学校、読谷尋常小学校として創立された村の教育発祥の地であります。以来、本校は幾多の変遷を経て、昭和二十三年に六・三・三制の施行とともに、喜名初等学校として開校し、読谷村東部の学校として年々発展の途にあり、平成十九年度には、創立六十周年の記念の節目を迎え、平成二十九年年度は創立七十周年を迎えました。

本校区は、歴史と自然環境にめぐまれ落ち着いた教育環境にあり、地域の学校教育に寄せる関心が高く、環境整備への協力は絶大なものがあり、本校は県下でも学校環境が整った学校として高い評価を得ています。

喜名、親志、座喜味の三行政区と新興の横田自治会を通学区とし、児童数は現在五百三十七名弱です。



漆喰が鮮やかな正門



自然豊かな教育の森

本校区の特徴は次の事項です

- (1) 座喜味城趾、やちむんの里、喜名番所、喜名焼窯跡等香り高い文化環境にある。
- (2) 子供会の育成等学校外活動が活発で児童の健全育成に大きな成果を上げている。
- (3) 行政区のまとまりが強く、学校教育への理解と協力が得やすい。

二 校長講話について

校長講話を実践するにあたり、私が常に意識している言葉があります。それは、三月まで勤務していた中頭教育事務所でお世話になった、前中頭教育事務所長宇栄原道夫先生がおっしゃっていた言葉です。

「校長から放たれた言葉が 職員の言葉となり

さらに、子どもの言葉として

学校中に響きわたったとき

教育活動が活性化し

学校文化が創造される」

私は、その言葉を胸に、校長の放つ言葉の重みを大切しながら、子ども達ひとり一人が自分や友だちの良さに気づき、子ども達や教職員と共に学校

文化を創造できるように校長講話を実践していきたいと考えています。

三 講話の実際

五月の校長講話テーマ「喜名小学校 いいところ探し」の実践を紹介します。
多くの学校で実践されていると思いますが、今回の校長講話は、日頃の子どもの活動の様子を写真に収め、その様子をプレゼンテーションで説明しながら進めました。その際、常に子ども達のために尽力されている教職員にもフォーカスし、学校が子ども達、そして教職員みんなの頑張りによって成り立っていることを、子ども達に伝えるように展開しました。



四 おわりに

校長講話の翌朝、ひとりの児童が「校長先生、私もみんなのためにがんばる」と言ってくれました。まさに校長の放つ言葉の重みを感じた瞬間でした。

これから何度も行おう校長講話ですが、初心を忘れず、丁寧に校長の思いを子ども達や職員に伝えていきたいと思えます。



学校教育目標達成をめざす講話実践

那覇市立首里中学校 校長 比嘉 俊博

一 はじめに

本校は、一九四八年、学制改革により設立し、創立七五年目となります。世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群 登録名首里城跡」の麓に位置している学校です。地域をはじめ、生徒や保護者は、ふるさと首里が「琉球王国四五〇年の間、政治及び文化の中核地域であったこと」に誇りと愛着を強く感じています。学校から首里城や天気が良い日に慶良間諸島が展望できます。このような歴史と伝統、由緒正しい地域を持つ本校に勤務させていただき、喜びと重責を実感しているところです。

令和四年度生徒数は六七一名です。学校教育目標「ふるさと首里を誇り、志高く未来の可能性に挑戦する生徒を育む」を、令和四年に設定し、「首里中生の自覚と誇り実現」を学校教育目標達成の手立てとしています。

「首里中生の自覚と誇り」とは、「・知徳体調和のとれた成長をする ・ふるさと首里を誇り未来社会を担う人材となる」の二本柱です。生徒は、教育活動、激励会あいさつ及び決意表明等で「首里中生の自覚と誇り」に係るキーワードを主体的に活用しています。保護者や地域にも慣れ親しん

だ生徒像と捉えています。

今年度前半の生徒の活躍は、めざましく、知徳体各側面で成果を上げました。「全国かるた百人一首大会個人の部」で三年生女子が準優勝を獲得しました。「科学の甲子園ジュニア大会」で、二年生チームが全国大会出場を果たしました。

全生徒で取り組んでいるボランティア活動に対し、県青少年赤十字学校表彰優良賞を受賞しました。地区中体連競技は、野球部、男子陸上部、男子駅伝部が優勝しました。合唱部と吹奏楽部が県コンクール金賞を受賞し、県代表として、九州コンテスト出場を果たしました。

二 校長講話の捉えと成果指標

私は、「校長講話」は、学校教育目標達成に係る「目指す生徒像」実現につながるものと、捉えています。

「校長講話」実践を通じて、生徒が、目標達成に向け、なすべきことの意欲向上につながることをめざしています。

校長講話の成果指標を、令和四年度学校経営実践に係る学校評価生徒アンケート九十項目中、最重要五項目（下図）とし、肯定評価九割以上を達

成としています。なお、生徒アンケートは、七月、十二月の二度実施し、生徒の育ちについて、全国比較や年度比較等を通じ、成果と課題を明らかにしています。

*令和四年度生徒アンケート最重要五項目
 ・自分には良いところがあると思う
 ・首里中生として自覚と誇りをもち行動している
 ・知徳体調和のとれた成長をめざし、なすべきことを努力している
 ・ふるさと首里を誇りに思う
 ・志チャレンジノートを活用し、目標管理を実践している

三 講話実践の留意事項（学校行事は除く）

次の事項に留意し実践しています。

- ① 講話時間は、全体朝会校長講話は十五分、その他は五分以内とすること
- ② 平易な言葉と年度当初生徒示した「首里中学校共通キーワード」を使い、表情や声にメリハリをつけて話す
- ③ 図表、写真は、分かりやすく、見やすくする
- ④ 講話内容は、職員に事前に周知し、目標連鎖を図る

四 年間計画（学校行事の式辞、挨拶は除く）

令和四年度、全体に係る朝会や集会は、オンラインで実践しています。オンライン朝会は、表彰時に、受賞生徒の顔が見える等、生徒の評判が良いです。年間計画は、次の通りです。

- ① 全体朝会校長講話
- ・ 四月 校長講話ガイダンス、学校教育目標達成に向けなすべきこと、志チャレンジノートの活用について
- ・ 七月 一学期前半終了の日 一学期前半ふりかえり、夏休みの過ごし方等

・八月 一学期後半開始の日 一学期後半になすべきこと等

・九月 前期生徒アンケートの結果分析から成果と課題及び対応策の共有

・十二月 二学期前半終了の日 二学期前半ふりかえり、年末年始の過ごし方等

・一月 後期生徒アンケートの結果分析から成果と課題及び対応策の共有

② 表彰朝会時の講話（年間七回実施）

表彰朝会は年十五回計画。偶数回は、表彰終了後五分間校長講話を実施します。そこで、目標管理実践ノート「志チャレンジノート」の意義や活用について、毎回繰り返し確認し、実践事例を取り上げ、生徒の取組意欲向上につなげます。

③ 新春の集い（十五分間）

新年一月五日の二学期後半開始の日に係る集会を「新春の集い」とし、年度始めに係る校長講話を実施します。

五 講話の実際

① 全体朝会 校長講話四月

「校長講話ガイダンス」

まず、校長講話のねらいと今年度の校長講話年間計画について説明しました。

次に、「学校教育目標」、「目標達成の手立てとなる首里中生の自覚と誇り」、及び「学校目標達成に係る評価について」を提示・説明し、生徒へ「頑張ろう」と激励しました。

また、今年度は、目標管理実践や個人目標達成に向け、取組記録と努力した成果が、より分かりやすくなるよう、昨年まで活用した

「夢実現ノート」を改訂し、「志チャレンジノート」を使うことを伝えました。活用のあり方について、具体的に説明しました。

むすびに、次の二点で、生徒を激励しエールを送りました。

・「生徒の皆さんの目標達成に向け努力していることや知徳体調和のとれた成長をしていることを、校長、教頭に話してください。生徒のみなさんの頑張りを激励します」

・「生徒の皆さんと皆さんを支援する保護者や先生と共に、首里中生自覚と誇りが実現できている首里中学校をめざそう」

② 全体集会 一学期後半開始に当たって

「一学期のまとめの意義と二学期の学校行事実践について」

まず、夏休みを安心安全に過ごし、本日生徒の皆さんが、一回り成長して元気に登校していることが喜びである旨を伝えました。一学期後半の四十日間は、年度前期個人目標達成のまとめの時期であることを話しました。

次に、二学期十月実施の体育祭、十一月実施の合唱コンクールに向け、それぞれの行事のねらいを確認しました。行事を成功させるために、今の時期（八月後半〜九月）のなすべきことを伝えました。ここでは、学級や生徒会で合意形成したことや集団の一員となすべきことを説明しました。

これらの行事は、今年度前半の首里中生の成長を保護者や地域の皆さんに披露する機会であることや集団活動の良さを実感し、行事を成功させ、「首里中生で良かった」と生徒、教職員で喜びを分かち合いたい旨を話し、講話を終えました。

③ 表彰朝会后講話（第五回十一月二十九日）

「志チャレンジノートの実践事例報告」

まず、これまで四回同様、同ノートの意義と、一年の三分の二期を終え、これまでの記録を読み返すことが大切である旨を話しました。

次に、同ノートを活用し、成果を上げた生徒の実践を紹介しました。

・駅伝部二年男子↓四月から取り組み、十一月の大会に向け、粘り強く実践し、自身の目標タイムとチーム目標タイムを達成したこと

・一年女子↓自宅でのスマホ使用時間を、三週間で、使用時間短縮に成功したこと

・三年女子↓中間テスト勉強と資格取得の時間を計画的に割り振り、目標管理型実践が実を結び、それぞれ目標が達成できたこと

六 むすびに

十二月実施の学校教育目標達成に係る生徒アンケート評価結果から、講話実践をふりかえり、成果は継続し、課題は、対応策に着手します。



ふるさと首里広場で、志チャレンジノートに取り組む生徒



表彰朝会後の講話実践



長崎での学びを自校の取り組みに

南城市立百名小学校 校長 仲村 保

〔はじめに〕

原爆投下日の九日を前にした長崎市内の様子は、七十七年前の惨劇を再開発が急速に進んだ長崎駅周辺の賑わいがかき消したかのように平和な日常の光景が広がっていました。

「新しき平和の 光さしそむる

荒野にひびけ 長崎の鐘」（永井隆）

この平和の光景の裏に長崎の方々が歩んだ戦後の努力の足跡が隠されていることを思うと人間の営為の素晴らしさを感じずにはいられませんでした。

今回、新型コロナの影響で二年ぶりの開催となった第七十四回九州地区小学校長協議会研究大会長崎大会の開会の挨拶で、長崎大会会長の山崎直人先生が永井博士のこの句に触れ、コロナ禍の中でも子ども達の学び、教育の鐘を響き渡らせ続ける責務を担っているのだと言う強い自負と責任を引き受けている覚悟に、改めて、子ども一人ひとりの可能性とその力を育てる役割を担っている学校や教育の役割、教職員を束ねる校長の責任の大きさを痛感しました。

二日間の研究協議の概要と私なりに学び取った感想を述べたいと思います。

〔一日目 全大会と分科会〕

① 「全連小会会長報告（会長 大字弘一郎）

全連小大会会長からは、二〇二二年六月の「教育公務員特例法」の改訂を受け、そのポイントとなるこれからの教師に共通的に求められる五つの資質能力として①教職に必要な素養、②学習指導、③生徒指導、④特別な配慮や支援を必要とする子どもへの対応、⑤ICTや情報・教育データの活用用の五つの柱の説明や教師の学びを実現していくための仕組みとしての研修履歴を活用した資質能力向上に関する指導助言等の在り方の説明がありました。後半は「校長として大切にしていること」として大会会長の所属校での校長としての取り組みの話の伺い、大会会長の柔軟な学校経営に感心させられました。

② 「分科会 第一分科会 協議題 「未来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定」

提案として、宮崎県都城市立西小学校谷川校長、福岡県田川市立伊田小学校出口校長の二提案がありました。まず、西小学校谷川校長からは、都城支会小学校長会に属している分科会各

校の「学校経営ビジョン」の策定方法として、重点項目の設定方法や策定するときの視点、活用等を研究した成果の報告や小中一貫教育の推進に関してこれからの時代に求められる資質能力の育成について

共通理解が図られたとの報告がありました。

田川市立伊田小学校出口校長からは、市教育委員会と各校が連携して取り組む学力向上の取り組みの紹介があり、アドバイザーとして景山メソッドで有名な景山英男先生や中村学園大学教授の山本朋弘先生からのアドバイスを貰いながら行う実践的な授業改善の取り組みの報告がありました。

この二つの提案を受けてのその後の意見交換では、各校から学力向上が大きな課題であることが指摘され、児童の基礎学力向上とこれからの時代に求められる資質能力との兼ね合い、そして、主体的・対話的で深い学びのための取り組みに対する意見交換を行いました。

〔二日目 教育情報交流会〕

二日目は教育情報交流会として、班別協議題が「学力向上対策について」でした。二日目も同じメンバーでの協議、かつ、テーマが学力向上であっただけに前日の話の延長という形で情報交換を行



いました。協議した五つの県の取り組みについて、各校で行っている具体的な取り組みを知ることができました。なお、各県の校長とも、自校の取り組みを紹介しているのので、県全体での取り組みではないことを確認しておきます。

① 教育情報交流会

〈福岡県〉

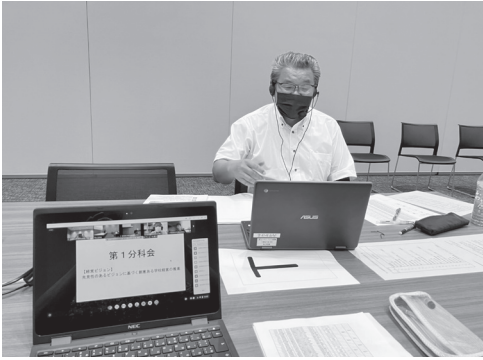
- ・「わかる授業づくり」として、そのポイントを共通理解し授業改善に取り組んでいる。
- ・学習の定着が低い児童に対しては、週二回巡回して二名の学習指導員が放課後に補習指導を行っている。
- ・校長・教頭・教務主任が算数の授業にT・Tとして参加している場合もある。

〈長崎県〉

- ・毎週朝の十五分間のドリルタイムでタブレットを活用した取り組みを行っている。また、MIM（多層指導モデル）を活用しての読みの力の向上を図っている。
- ・教育委員会とも協議して「タブレット端末」を持ち帰らせての宿題の取り組みを行っている。

〈宮崎県〉

- ・教育委員会の取り組みとして教師の授業力向上を図るために「スパーチャーター」の授業を参観する



研修がある。

- ・一週間に一度、三十分程度基礎学力向上のためにフリー職員も入ったの補習指導を行っている。

〈鹿児島県〉

- ・授業改善の取り組みとして特に、授業終わりの時間（振り返り）を大事にして取り組んでいる。
- ・週日課に、毎週水曜日三十分の補習指導を位置づけ取り組んでいる。

② 教育情報交流会を終えて

私が参加した班は、どの学校でも学力に課題があり、授業改善を中心に学力向上を図っているが、補習指導を行っているのが実態です。各県とも、校内研修や教育委員会との連携による授業改善を図っているものの、どうしても追いつけない一定数の児童の学力の定着への対応は難しい問題であると改めて思いました。また、校長として、学級経営や指導に課題のある先生にどのように指導・助言していくかも難しい問題の一つであると思われました。

「おわりに〜二日間の感想〜」

「伸びようとする気持ちを持たない人は子どもとは無縁である。」

この言葉は、大会会長山崎直人校長先生が閉会式で紹介した大村はま先生の言葉です。大会後、家にあつた大村はま先生の古い二冊の著書に目を通しました。「日本一先生は語る」（平成二一年）「教室に魅力を」（平成十年）です。最近読んだどんな教育書よりも心を揺さぶられました。子どもを見る目、子どもへの指導、教材研究に臨む姿

勢等々。子どもの前に立つ教師としての姿と覚悟は、相当厳しものがあります。はま先生の言葉です。

「研究をしない先生は「先生」ではないと思います。（略）「研究」ということから離れてしまったという人はもうお年寄りだと思っんです。つまり、前進しようという気持ちがなくなっていますから。」

「研究」と言う言葉を「研鑽」に、「先生」を「校長」に置き換えて考えると少し怖くなってきます。研鑽を図り前進し、その姿、知識を持つて職員に接したいものです。そうでなければ正しく「お年寄り」と見られてしまいます。

今回、九州地区小学校長協議会研究大会長崎大会に参加させて頂き、今後の教職員の資質向上における校長の役割の大きさと、九州各県の校長先生方が、地域の特性、課題に向き合い学力向上をはじめ、子ども達に身につけさせるべき資質能力のために尽力している姿に刺激を受けました。今大会に参加したことによって気づかされた本校児童の実態に応じた身につけさせる力について、学校職員はもとより、教育委員会や中学校との連携、保護者や地域の方々の思いを考えながら学校経営に臨みたいと強く思いました。

県校長会事務局崎原先生はじめ、県校長会会長宮國校長他、懇親を深めた参加した多くの校長先生方に感謝致します。ありがとうございます。



豊かな未来社会を創る子どもの育成

那覇市立銘苅小学校 校長 宮 國 義 人

はじめに

「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の主題と「ふるさとを学びの原点に、主体的・協働的に学び合い、豊かな未来社会を創る子どもの育成」の副主題のもと、第七十四回全国連合小学校長会研究協議会島根大会が、十月十四日に、島根会場と東京会場をオンラインで結ぶ方法で開催されました。

開催に至るまでの経緯として、五月の第一回理事会においては、三年振りに対面で開催することについて全理事で確認し、それに向けて島根県校長会には動いて頂きました。しかし、六月以降も新型コロナウイルス感染者数は全国的に増加傾向にあったため、七月の常任理事会で参集型での開催を見送り、前述の方法で開催することを決定しました。それに伴って、開催日を当初の二日間から一日に変更し、分科会への参加も島根会場には島根県の校長が、東京会場には全国の理事と東京都の校長が参加して行うという変則的な形での実施となりました。そのために、本県から参加した校長は、当初予定の十一名から、私と久辺小学校の上間享校長（県副会長）、そして、第八分科会の発表者である八島小学校の仲地秀将校長と補助

者の伊野田小学校の真玉橋真由美校長の四名だけになってしまいました。当初の十一名で出雲の国、島根県を訪れ、互いの絆を深めることができなかつたことが心残りです。

それでも、誌上发表ではなく、ハイブリッド方式で開催して頂いた全連小に感謝しています。なお、次年度、節目の第七十五回東京大会（研究協議会並びに記念事業）を控え、それに向けての準備に余念がない東京都公立小学校長会が、本年度も分科会運営に関わって頂いたお陰で今回の研究協議会が充実しました。そのような東京都公立小学校長会の姿勢にも頭が下がる思いがした、今回の研究協議会でした。

一 開会式

大会会長の大字弘一郎全連小会長は、「これからの社会は、その在り方そのものがこれまでとは非連続的と言えるほど、劇的に変わる状況にあります。教育を巡る状況も変化のスピードを増しています。校長は、子供たちの多様化・情報化の加速度的な変化に対応するだけでなく、自らが変化の先頭に立ち、新たな価値を見出していくという気概を持って、小学校教育に関わる自負とその職責の重大さを自覚し、常に自らを磨き全国の小学

校教育の更なる発展に全力を注ぎ、国民の期待に応えなければなりません。教育は未来を創る営みであると言えます。」との旨の挨拶を述べました。

その他に、大会実行委員長の越野和胤（島根県会長）の挨拶と、文部科学大臣ご名代の安彦広斉様（大臣官房審議官）、島根県教育長の野津健二様、松江市教育長の藤原亮彦様から祝辞を賜りました。

二 文科省講話

大臣官房審議官の安彦広斉様が、「最近の初等中等教育の動向」と題して、①学校における新型コロナウイルス感染症対策について、②令和の日本型学校教育の構築を目指してについて、③幼児教育と小学校教育の架け橋について、④GIGAスクール構想の推進について、⑤小学校における三十五人学級の計画的な整備と高学年の教科担任制の推進について、⑥教師の資質能力の向上等について、⑦学校における働き方改革について、⑧特別支援教育について、⑨いじめ・不登校支援・児童虐待対応等について、事細かく説明しました。

三 全体会

①日程説明、②本部報告を荒川元邦（対策部長）が述べ、③大会副主題・研究課題趣旨説明を丹羽隆（大会研究部長）が行いました。それぞれの内容については、大会要録のP.5～P.5を参照ください。



四 参加分科会（第八分科会）

幸いなことに、本県の石垣市立八島小学校の仲地秀将校長が発表した第八分科会で、仲地校長を中心に応援しながら参加することができました。

研究課題…これからの学校経営を担うリーダーの育成。

視点①…学校教育への確かな展望をもち、優れた実践力と応用力のあるミドルリーダーの育成

沖縄県石垣市立八島小学校 校長 仲地秀将

八重山地区が抱えている課題（中堅教諭の少なさ等）を踏まえ、本県の経験年数を踏まえた各ステージの育成指標に基づき地区校長会で研究を深め効果を上げた取組を、丁寧且つわかりやすく発表していました。



分科会に参加した、理事や東京都の校長からも、教師一人一人の実情や資質等を踏まえて、責任ある校務分掌を担当させることで、視野を広げたり、学校経営に参画する態度を育てたりしている点に感銘した。などの声がありました。発表した仲地校長の声の質やコンパクトにまとめた各スライドの充実度など、全てが素晴らしい発表でした。（拍手）

視点②…社会の変化に主体的にかかわり、自ら学び続ける管理職人材の育成。

島根県邑南町立瑞穂小学校 校長 大屋裕二
島根県邑智群（川本町、美郷町、邑南町）の実態（教員の年齢層が比較的高いことや八校のうち五校が複式学級編制であること等）を踏まえて、

個々がキャリアプランを意識するワークシートを作成し、これまでの自分や現状を見詰めさせたり、将来の自分を描かせたりすることを可視化し、「自分の強みは何か」や今後「高めたい資質・能力は何か」などを認識させ教師個々の能力を高める取組について発表していました。大屋校長の発表も具体的に示唆に富んだ発表でした。理事や東京都の校長からも、校長と職員が話し合いを基に作成し確認したワークシートを適宜用いて、目標を意識させることは有効な手立てであり、自らも同じようなワークシートを作成して職員の能力を高めた。などの声がありました。

仲地校長と大屋校長の発表の詳細については、大会要録のP92～P100を参照ください。

五 鼎談

今回は進行役を置かず三人がそれぞれの立場で話し合いを進める鼎談（ていだん）の形で、「豊かな未来社会を創る子どもたちへくふるさと原点創造」について話しを掘り下げました。鼎談者は、加納佳世子氏（加納美術館名誉館長）と小泉凡氏（小泉八雲記念館館長）、豊田庄吾氏（海士町役場人づくり匿名担当）の三人でした。

六 閉会式

①大会宣言（大会要録P108・P109）…大会宣言文起草委員長の住久由樹子（松江市立中央小学校）が、宣言文の作成についての経緯（これまでの研究成果と課題を引き継ぐとともに、新主題に取り組む決意を示していることや東日本大震災に係る内容を追加したことなど）や事前に大会要録に掲載した理由について説明しました。

②大会実行副委員長挨拶…三賀森卓司（松江市

立乃木小学校）が、参加者全員が参集しての大会を開催することはできませんでしたが、事前に全国の一万余人を超える全ての校長に大会要録を配布し、大会に参加して頂く方法をとったことなどについて説明しました。

③次期開催地代表挨拶…平川惣一（東京大会実行委員長）が、東京都の校長が自作した東京都の多くの名所を紹介した動画を用いて案内することにも、副主題を「多様な人々と協働しながら、新しい価値を生み出し持続可能な社会と幸福な人生の創り手となる力を育む学校経営の推進」と設定したことについて説明しました。次年度の東京大会は、令和五年十月十九日（木）と二十日（金）に東京国際フォーラムを主会場に開催されます。

七 おわりに

『古事記』や『日本書紀』にも登場し、『出雲国風土記』には、「出雲」と名付けられた根拠が示されるなど、古から宗教国家を形成して発展したと言われている出雲の国、島根県に集い、全国の校長と交流を深めるはずだった今回の研究協議会でしたが、本年度も新型コロナウイルスにより前述の通りの開催になりました。それでも、誌上開催ではなくハイブリッド型で開催したことは、次回大会につなぐ上でも有意であったと思います。

そのような状況で、本県からは四名のみの参加となつてしまいましたが、第八分科会で仲地校長が立派にその役割を果たすなど、全国に本県校長会の意識の高さを発信できた大会だったと捉えています。

結びに、今一度、手元にある『大会要録』を開き、今後の学校経営の充実に生かすことをお願いし、全連小島根大会の報告とさせていただきます。



全九州中学校長研究大会 福岡大会に参加して

宮古島市立伊良部島中学校 校長 與那覇 盛彦

はじめに

第七十三回全九州中学校長研究大会福岡大会が、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」を大会主題として、八月二十三日（火）～二十四日（水）の二日間、福岡市の福岡国際会議場で行われた。コロナ禍での開催であったが、九州・沖縄各県から七六一名の参加となり、活気ある研究大会の開催となった。



びの実現に向けた取り組みの充実を図ることが大切である。

また、公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針の改正（案）では、今後特に校長に求められる資質能力として、様々なデータや学校が置かれた内外環境に関する情報について収集・整理・分析し共有する力の「アセスメント力」と、学校内外の関係者の相互作用により学校の教育力を最大化する力の「ファシリテーション能力」が求められる等の報告がされた。

二 分科会

第五分科会
研究主題 「多様化した教育課程に対応できる学校経営と教職員の育成」

◎協議題①

教職員の専門性と指導力を発揮する研修や学校運営の在り方

○提案者 沖縄県宮古島市立久松中学校

校長 垣花秀明

○研究の概要

令和三年度から新学習指導要領が本格実施となり、「社会に開かれた教育課程の実現」、

「主体的・対話的で深い学びの充実」、「カリキュラムマネジメントの確立」が求められる。また、GIGAスクール構想（生徒一人一台の端末配備）、新型コロナウイルスの影響等により学校が対応すべき教育課題は増加し多様化の様相を呈している。このような中、学校経営を円滑に進めていくためには、教育課題に柔軟に対応できる実践的指導力を持つ教職員を育成することが重要になる。そのためには、校長がリーダーシップを発揮して学校の教育活動の質を高めると共に、それぞれの教師の校務分掌上の役割に応じた主体的な取組を支援していくことが大切である。

○学校の取組

- ①教職員の資質・指導力、専門性を高めるための校内研修
 - ・組織的な授業改善
 - ・「単元プランシート」や「授業プランシート」を活用した授業改善への取組み
 - ・各学年所属職員による道徳ローテーション授業の実施
 - ・特別支援教育研修会
- ②新たな教育課題に対応するための研修
 - ・授業におけるタブレットPCの活用についての研修
 - ・外部人材活用による情報モラル講習会
 - ・大学生との遠隔プログラミング学習

（所感）

急速な時代の変化と多様化した教育課題への対応として、学校経営の充実を図るため、校長の関わりが具体的に確実な実践のもと学校経営を充実させていることが伝わってきた。どの取り組みも組織マネジメントサイクルを充実させているからこそ教職員の資質や指導力、専門性を高める取組が充実していると感じた。また、コロナ禍での新たな取組実践も紹介され、今後の学習指導の可能

一 全日中報告

全日本中学校長会 平井邦明 会長

新学習指導要領全面実施から一年半経過した今、「新学習指導要領の四つのポイント」や「令和の日本型学校教育」のめざすところ等を再確認し、二〇二〇年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、全ての子供たちの可能性を引きだす、個別最適な学びと、協働的な学

性もうかがえた報告であった。

◎協議②

学校経営に積極的に参画する教職員の育成や
人事評価の在り方

○提案者 長崎県諫早市立高来中学校長

○研究の概要

諫早市校長会では、研究主題「多様化した
教育課程に対応できる学校経営と教職員の育
成」に関連する取組や多様化した教育課題に
ついて、校長がどのように課題を受け止めて、
教職員の参画意識を高め、具体的な取組につ
なげていくのか、学校経営に参画する教職員
の育成に関するアンケート調査を通し、課題
や着眼点について考察するとともに、具体
的な活動方針を究明することに取り組んだ。

○学校の取組

①アンケート調査の実施と整理

記述式によるアンケートを実施し、各校
の状況や校長自身の見解を踏まえた回答、
意見を整理して傾向を見た。

・学校経営方針を浸透させる取組

・学校経営に参画させる取組

・学校経営への関心

・学校経営での不安

・学校経営での重要事項

・教職員に必要な資質・能力

などの項目を意識した左の選択式アンケー
トを実施し、より具体的な傾向を探り活動

指針を検討した。

・あなたは、学校経営方針を教職員に浸透
させるために、どのようなことに取り組
んだらよいと思いますか。

・あなたは、教職員が学校経営に参画する
ためにどのような取組が効果的だと思

ますか。

・あなたの学校経営について、教職員の関
心が高いのはどのようなことですか。

・あなたが、学校経営において不安に感じ
ることはどのようなことですか。

・あなたが、学校経営に重要であると感じ
ることはどのようなことですか。

・あなたは、教職員にどのような資質が必
要であると思いますか。

②研究の実際

選択式のアンケート結果を基に学校経営
参画に関して取り組むべき傾向を考察し
た。

③成果と課題

○成果 ・学校経営に積極的に参画する教
職員の育成のための方向性を得
ることができた。

○課題 ・人材育成の大切さ、専門性と指
導力を備えた教職員の育成が必
要かつ急務である。

・働き方改革

(所感)

教職員の研修や校内支援体制を充実させる学校
経営、教職員の資質能力を高めるための育成、長
崎県でこれから導入される人事評価の実施を控
え、諫早市校長会として、アンケート調査を実施
し、課題や具体的な活動方針を明確にすることは
とても意義のあることだと考える。今回のアン
ケート結果を今後の学校経営の充実、校長会の活
動の充実につなげ、マネジメントサイクルを活か
しながら学校経営や校長会の取り組みを充実させ
ようとする諫早市校長会の取組はとても参考に
なった。

三 記念講演

○演題「不揃いの木を組む」

～ 技を伝え、人を育てる ～

○講師 鶴工舎 頭領 小川三夫 氏

(所感)

小川氏は神社仏閣の建築や補修に携わる宮大工
である。講演では、宮大工として経験してきたこ
と、師匠と弟子の関係、鶴工舎での生活の様子な
どの話があった。小川氏は、日本の文化を残す、
伝統を本物の形で後世につなぐことをとても大切
にとらえ、またそのために一貫した師弟関係のあ
り方を徹底されている。弟子の育成については、
師匠がイチから方法を説明するのではなく、弟子
が師匠と同じ時間を過ごすなかで、宮大工として
の技術取得や姿勢等、例えばのこぎり等の研ぎ方
や保管の工夫、その理由を自ら考えながら学んで
いく。そのような一貫した弟子の育成を徹底して
いる。小川氏の講話は人間としての生き方に魅力
を感じる話であり、また学校教育に通ずる内容も
多く、参加者を引きつける講演であった。

おわりに

今回大会に参加し、学校を経営する校長とし
て、児童生徒に自分の未来を切り拓く人間力を身
につけさせること、その人間力を身につけさせる
ために教師の専門性や指導力を高めるための学校
経営に努めていく決意を改めて強く持つことがで
きた。この研究大会で得た事をこれからの学校経
営に反映させていきたいと思う。今回このような
貴重な経験をさせていただいた県、地区校長会に
心より感謝を申し上げ、大会に参加した報告とさ
せていただきます。

第七十三回 全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会「オンライン形式」参加報告



座間味村立慶留間中学校 校長 大城 圭

イランカラプテ 北の大地から 新たな学びを紡ぎ その先へ

はじめに

第七十三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会



感染症の感染状況が改善しないため、前回の静岡大会に続いてオンライン形式での開催となりました。本県から十一名、全国からは九百余名の学校長の参加がありました。

本大会は「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」の研究協議会テーマのもと、全体協議会、各分科会において活発な協議が行われました。

本大会のスローガンの「イランカラプテ」とはアイヌ語で、「イ」＝「それ（あなた）」、「ラン」＝心、「カラプテ」＝「触れる」、「テ」＝「させる」という意味から「あなたの心に触れさせてください」との解釈になり（諸説あり）、今大会を通して全国の校長先生方が心を通わせ、新たな時代の

教育について学び合っていたいただきたいとの北海道の校長先生方の願いが込められています。

I 開会式

大会長より、文部科学省より示された「令和の日本型学校教育」を受け、「個に応じた指導の充実」「個別最適な学びと協働的な学びの充実」の取組、教員免許更新制度の廃止に伴う、「新たな研修システム」への移行による教員の育成等、管理職によるリーダーシップの発揮が一層求められている等の挨拶がありました。

II 文部科学省説明

「最近の初等中等教育の動向」と題して、文部科学省安彦広斉大臣官房審議官による講話と資料提供がありました。提供資料の項目は左記のとおりです。

- ① 学校における新型コロナウイルス感染症対策について
- ② 学習指導要領、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（中教審答申）について
- ③ GIGAスクール構想の推進について
- ④ 小学校における三十五人学級の計画的な整備と高学年の教科担任制の推進について

- ⑤ 教師の資質能力の向上等について
- ⑥ 学校における働き方改革について
- ⑦ 特別支援教育について
- ⑧ いじめ・不登校支援・児童虐待対応等について（参考）コミュニティ・スクールについて

III 全体協議会

第一研究議題（全日中提案）

学校からの教育改革

近年の調査研究報告書から読み取れる教育課題とその解決に向けて、教育課程の編成・実施に関連して、①「カリキュラム・マネジメント」の実施状況、②「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」、③教育課程の実施に必要な人的または物的な体制を確保すること、また授業改善の視点として示された「主体的・対話的で深い学び」についての調査結果とその課題解決に向けた提案がありました。

第二研究議題（地域提案）

伝統文化教育を活かした人材育成

→ 歌舞伎「勸進帳」上演を通して、

石川県小松市中学校文化連盟では、伝統や文化に関する教育の一環として、市内の十中学校が持ち回りで、歌舞伎「勸進帳」の上演を行っており、グローバル化の進展や社会の変化にとともに、取組の意義は増している。市内中学校校長会では、「勸進帳」上演について、生徒の育成だけでなく、教師としての資質・能力を高める場として位置づけ、取組の推進を図っています。

「勸進帳」上演は、地域の伝統文化を受け継ぎ、それを教育に活かしていくという取組であり、さらに地域との関わりを通して、教師としての資質・能力を高めていくことができるものとして捉えている。多様化する学校課題の中、生徒、教職

員への負担等の課題を踏まえた上で、取組を推進していく必要があるとの報告がありました。

IV 分科会

一日目の午後に分科会が行われました。

分科会では八の分科会に分かれ、分科会毎に設定された研究題に係る提案発表と研究協議が行われました。

参加した第四分科会は「健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実」について協議を行いました。

協議題① 外部資源の活用や地保学の連携による、コロナ禍でより充実した教育活動を図る学校経営

提案者 石川県能登町立松波中学校長

研究題の実現に向けて、視点1「運動に親しむ資質・能力の育成と体力向上」、視点2「心身の健康の保持増進に関する指導」、視点3「身の回りの安全、防災教育の充実」の3点で実践的に取り組んだ研究発表である。視点1では、オリンピックや外部講師に学ぶ取組を行政と連携して効果的に実施し、生徒の意欲を高める好事例でありました。視点2では、起床・就寝・食事の調整の大切さとネット利用の弊害を家庭との協力によって改善に繋げている。視点3の地域と連動した防災教育は、コロナ禍による自粛要請の中であっても学校の工夫を持った実践を通して成果をあげ、防災意識を持久走のモチベーション向上に繋がっていました。

また、来年度から土日の部活動に関わって地域へ移行する動きがあり、提案者の能登町では柔道や剣道について地域の社会体育との連携が進んでいるとの事例の紹介があったが、班別協議において他府県の進捗状況からは、地域移行は進んで

ない状況がありました。

協議題② 校長として生徒の課題をどのように把握し、心身の健康の保持増進のため

に家庭や地域と連携して取り組むか

提案者 三重県亀山市立関中学校長

コロナ禍で生徒の健康や体力等に不安を感じ、市内の全中学校（三校）が連携協力して取り組んだ実践発表である。心身の健康の保持増進に関する指導の充実のため、「新体力テスト」や「ネット・ゲーム等についてのアンケート」の結果を活用したり、「不登校の増加」や「生徒のメンタルヘルス」については、各中学校で課題を分析し、関係機関につないだり、講師を招聘して授業を行った。市内中学校が課題を共有し、生徒の実態を把握し比較することで、組織的な改善に向けた取組が確認できる実践であった。さらに、コロナ対策を含めた社会変化による課題解決のために連携することの大切さを示したことに価値がありました。

アトラクションの「アイヌ・アート・プロジェクト」によるアイヌ民謡と舞踏のステージから二日目の日程が始まりました。

V 全体会

第七十三回全日本中学校長会研究協議会北海道（札幌）大会宣言（案）と決議（案）の提案があり、オンラインでの承認採決を行いました。

採決の結果、賛成多数で「大会宣言」及び「大会決議」が承認されました。

VI 記念講演

演題 「日本に突き付けられる新たな規範

～ポリティカル・コレクトネス～」

講師 山口 真由氏（信州大学特任教授・

ニューヨーク州弁護士）

家族法の研究者として活動する一方、執筆、講演、コメンテーターとしてテレビ出演など幅広く活躍する中で、財務省時代の事柄も随所に織り交ぜながら、これからの世界的な激動の時代に日本が自らの道を選択していくために必要となる考え

方等についての講演内容でありました。

今後の世界はすべての場面で多様性が進み、日本でもミレニウム世代やZ世代が社会で活躍する時代が到来して多様性も加速化していく。さらに西洋的価値観（個人の権利重視）やLGBTQ等のジェンダー論も関連して「※ポリティカル・コレクトネス」が急速に拡大しています。

（※あらゆる人（特に少数者）を差別しない、不快感を抱かせない表現のこと）

日本でも保母を保育士、看護婦を看護師と呼称するようになったこともその一例です。

平等な社会を実現するためには、ポリティカル・コレクトネスの視点は重要だが、行き過ぎた平等、行き過ぎた配慮は、時として表現を制限し過度に批判する社会になる可能性があります。

これからの日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

このことから日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

このことから日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

このことから日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

このことから日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

このことから日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

このことから日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

このことから日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

このことから日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

このことから日本の選択として、「家」から「個人」への価値観の転換や、企業形態も「家族型組織」から「レジリエント企業（価値で結ばれたプロ集団）」への転換が進んでいきます。

沖縄県小・中学校長会会報第83号

発行者 沖縄県小・中学校長会
住 所 那覇市松尾1-6-1 (沖縄県教職員共済会館八汐荘3F)
電話 098-943-9747 FAX 098-943-9748
E-mail: oki-koutyukai2@kca.biglobe.ne.jp (事務局長)
oki-koutyukai1@kpe.biglobe.ne.jp (事務局員)

印 刷 株式会社 国 際 印 刷
電話 098-857-3385 FAX 098-857-3892
E-mail: kokusai@herb.ocn.ne.jp
